

Contribution of Aurora-A and -B expression to DNA aneuploidy in gastric cancers

本間, 健一

<https://hdl.handle.net/2324/1807142>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

(別紙様式2)

氏名	本間 健一
論文名	Contribution of Aurora-A and -B expression to DNA aneuploidy in gastric cancers
論文調査委員	主査 九州大学 教授 小田 義直 副査 九州大学 教授 中村 雅史 副査 九州大学 教授 續 輝久

論文審査の結果の要旨

染色体数が異常を来たした状態である DNA aneuploidy は発癌や悪性腫瘍の発育と密接に関係している。染色体が正常に分裂しない場合に細胞分裂の間に aneuploidy が起こる。Aurora キナーゼ (Aurora-A と Aurora-B と Aurora-C) は正常な細胞分裂に関与し、細胞分裂に特異的な抗癌剤に対する分子標的候補である。

申請者らは胃癌 110 症例のホルマリン固定パラフィン包埋標本を用いた免疫組織化学染色にて Aurora-A と Aurora-B の発現を解析した。また同じサンプルを使用して DNA ploidy、TP53 遺伝子の突然変異とマイクロサテライト不安定性も解析した。

その結果、Aurora-A と Aurora-B の核での発現は、正常胃粘膜上皮と比較して癌部で上昇していた。Aurora-B 高発現は aneuploidy および TP53 遺伝子突然変異と相関関係を認めしたが、マイクロサテライト不安定性とは相関関係を認めなかった。Aurora-B とは対照的に、Aurora-A の発現は DNA aneuploidy とマイクロサテライト不安定性のどちらも相関関係を認めなかった。これに加え、Aurora-A および Aurora-B の発現の強さと臨床転帰や予後とは相関関係を認めなかった。

以上の結果より Aurora-A と違い、Aurora-B の過剰発現が染色体不安定性を促進することにより、胃癌における DNA aneuploidy と関与することが示唆された。

以上の結果はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々の質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員会合議の結果、試験は合格と決定した。